

令和 7 年度 となみ散居村学習講座

となみ散居村を学ぶ

< 第 7 回 >

・期 日 令和7年12月20日(土) 13時30分～15時00分

・テーマ ~となみ散居村の安心づくり資源~

「立山信仰を拝した

となみ野人の信仰」

・講 師 北陸大学 国際コミュニケーション学部

教 授 福江 充 氏

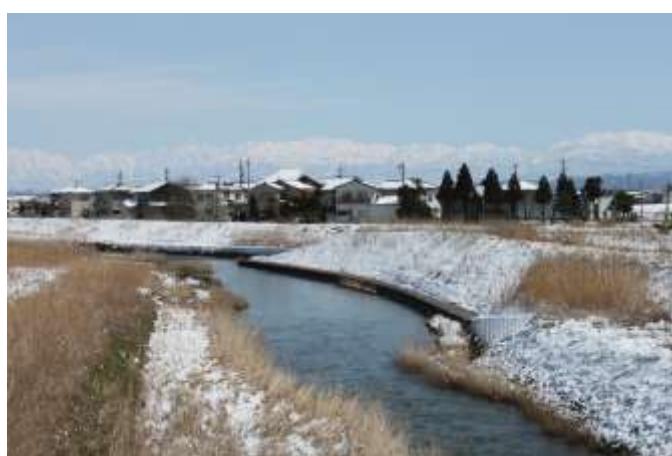


岩嶺雄山神社前立社壇の神門（立山町）



〔基礎面〕 磯波郡
先蟹谷組 (北蟹谷組)
講中
〔正面〕 順主 六角坊 安之ゑ 内山村 平田村 与三右衛門 浪江村 世話人
(背面) 嘉永二年(一八四九)
酉七月

岩嶺雄山神社前立社壇の石燈籠と基礎部の銘（立山町）



渋江川越しに望む立山連峰（小矢部市内）

主催 となみ野田園空間博物館推進協議会・となみ散居村ミュージアム

1 講座趣旨

砺波平野の散居村および周辺における歴史、文化、地域社会の現状などに関する学びを通して、地域理解を深めるとともに、全国に誇りうる散居村の魅力を発信し、ついては、望ましい形の景観保全と活性化につなげる。

2 後援 砧波散居村地域研究所

3 会場 となみ散居村ミュージアム情報館・研修室

4 講師紹介

昭和38年 富山県小矢部市

平成2年 富山県〔立山博物館〕建設準備室に学芸員として採用

平成3年 富山県〔立山博物館〕学芸員

平成25年 高志の国文学館副主幹・学芸員

平成29年 北陸大学未来創造学部准教授

平成31年 北陸大学国際コミュニケーション学部教授 現在に至る

金沢大学より博士号（文学）取得

専門 日本近世史 日本宗教民俗学

第9回日本山岳修験学会賞 第3回日本学術振興会賞 第24回とやま賞受賞
富山県優良職員表彰(平成19年度) 日本博物館協会顕彰(平成26年度)

主な著書（単著）

『立山信仰と立山曼荼羅』（岩田書院 1998年）

『近世立山信仰の展開』（岩田書院 2002年）

『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界—』（法蔵館 2005年）

『立山信仰と布橋大灌頂法会』（桂書房 2006年）

『江戸城大奥と立山信仰』（法蔵館 2011年）

『立山信仰と三禪定』（岩田書院 2017年）

『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』（岩田書院 2018年）

『立山地獄谷のあだ討ち 十返舎一九『越中楯山幽霊邑讐討』を読む』

（法蔵館 2024年）

學習講座 第7回講座

となみ散居村学習講座

「立山信仰」とは何か？

福江 充

(北陸大学 国際コミュニケーション学部 教授)

1.立山信仰を理解するための必須ポイント

- 「立山信仰」や「立山曼荼羅」の用語は現代の研究者による学術用語（造語）である。「**立山大権現**」がキーワード。
- 立山信仰は「民間信仰」である。
「成立宗教（諸創唱宗教）」 ⇔ 「民間信仰」
- 立山信仰は「習合宗教」である。※**神仏習合** ※**本地垂迹**
- 立山信仰は**「民俗宗教」**（民間信仰+習合信仰=民俗宗教）
- 江戸時代の幕藩体制下、立山信仰の世界は**加賀藩**に徹頭徹尾、支配されていた。※**寺院法度** ※**本山末寺制度** ※**寺請制度**
- 加賀藩が立山の管理を山麓の芦嶋寺と岩嶋寺の衆徒に任せ、さらに芦嶋・岩嶋両寺の立山に対する**宗教的権利を分与**した点は、立山信仰の近世的展開を考えるうえできわめて重要。
- 立山信仰の世界を総合的とらえる際には、地元（立山）と**檀那場**（布教地）、そしてそれを繋ぐ立山衆徒（芦嶋寺と岩嶋寺の衆徒）とその情報（立山信仰の内容）について検討しなければならない。

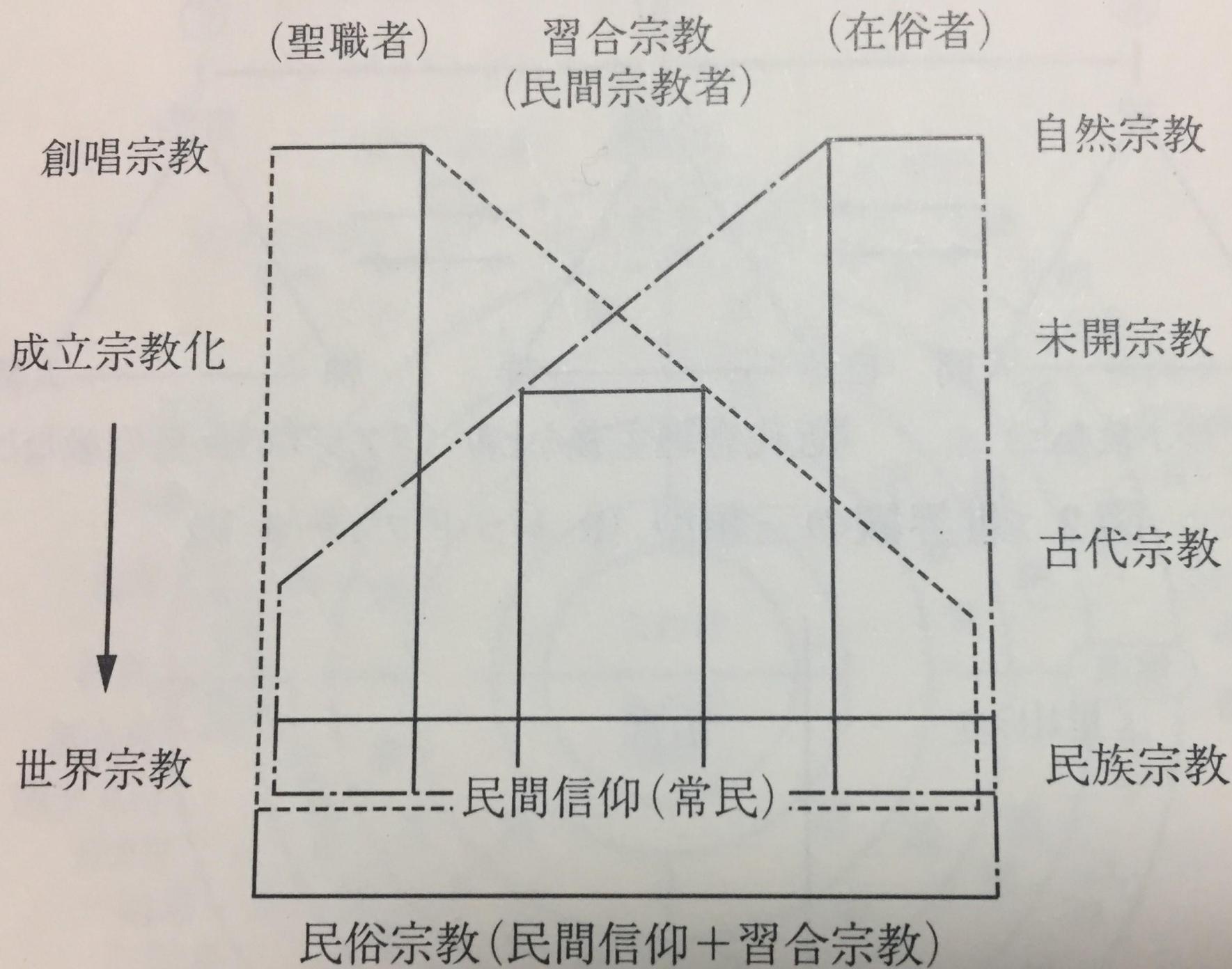
世界宗教と民族宗教

普遍宗教

民俗宗教→民族宗教

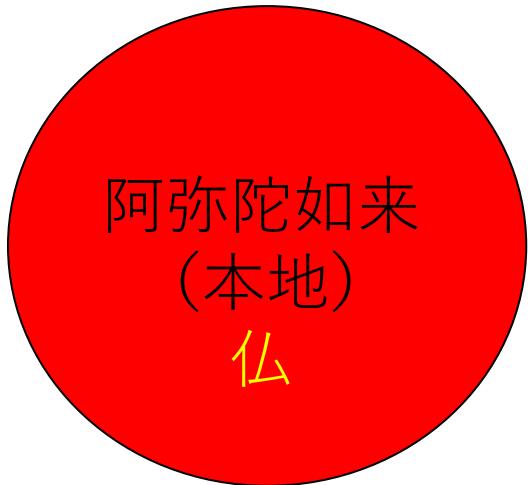
	世界宗教	民族宗教
主な宗教	キリスト教 イスラム教 仏教など	ユダヤ教 ゾロアスター教 ヒンドゥー教 道教 神道など
特徴	<ul style="list-style-type: none">民族という枠を超えて、世界に広がっている誰でも信仰すれば救われる創始者がいて生まれた宗教組織化されている	<ul style="list-style-type: none">特定の民族のための宗教民族特有の習慣や風習を取り入れている特定の民族の繁栄を基本にしている生活の中から自然発生的に生まれた

民族宗教→普遍宗教



立山信仰にみる神仏習合

外来の神（仏）



変身

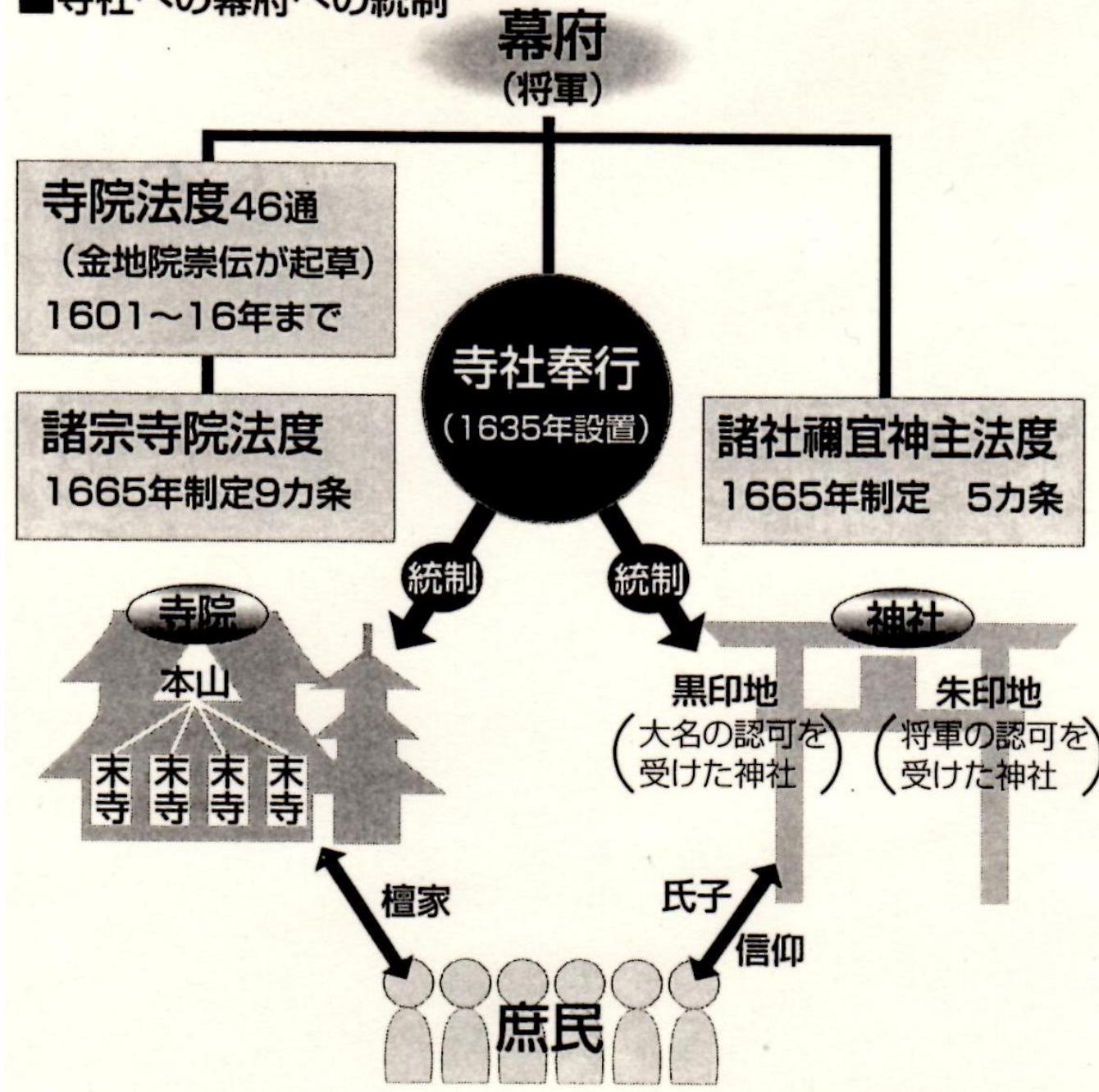


日本の神

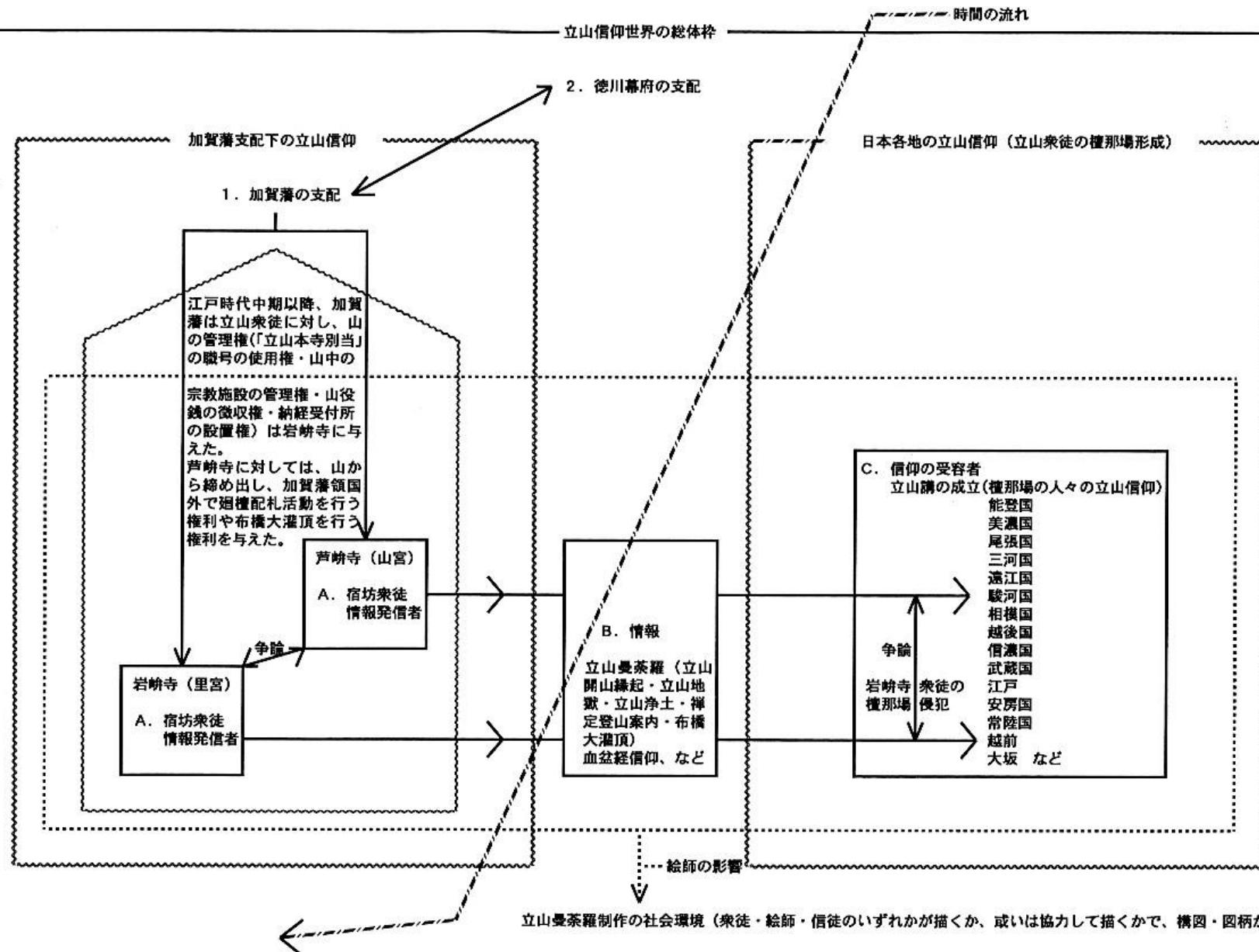
立山の場合は阿弥陀如来
がそのままの形で神として表現、造形された。



■寺社への幕府への統制



江戸時代後期における立山信仰世界の模式図



2. 岩嶽 寺



雄山神社前立社壇（富山県中新川郡立山町岩崎寺）



雄山神社前立社壇 拝殿・摂社・末社

古い神殿・お札・お守り・〆飾り等は
社務所にてお預りいたしますので
お持ち下さい。

岩崎雄山神社社務所



岩崎寺雄山神社前立社壇の石燈籠

(願主:岩崎寺六角坊、施主:砺波郡先(北)蟹谷組講中、嘉永2年[1849])



(右側面) 磯波郡

先蟹谷村

講中

世話人

渋江村

与右衛門

平田村

与三右衛門

内山村

安之ゑ

(正面) 願主

六角坊

(背面) 嘉永二年(一八四九)

酉七月







南砺市福野地域石田の立山社



3.芦嶠 寺



芦嶽寺から望む大日岳・立山本峰・浄土山



芦嶽寺の不動山中腹から見下ろす芦嶽寺集落





芦嶽寺雄山神社 中宮祈願殿



芦嶺寺雄山神社 若宮



芦嶺寺雄山神社 大宮



芦嶼寺雄山神社 立山開山慈興上人廟所



芦嶽寺雄山神社 開山堂



芦嶋寺閻魔堂



富山県 [立山博物館] 教算坊

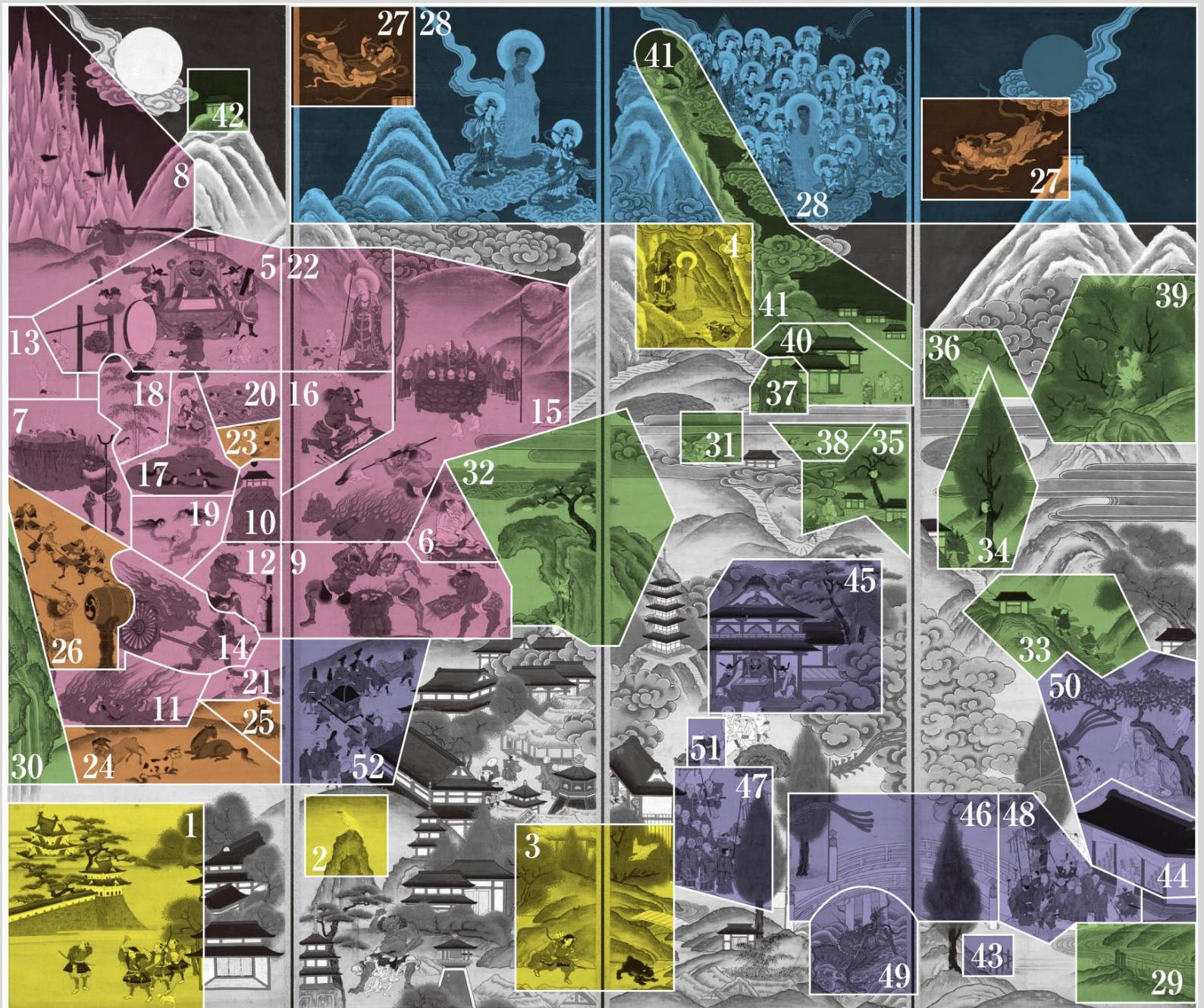


芦嶋寺善道坊

4.立山曼荼羅のバーチャル靈場



『立山曼荼羅 大仙坊A本』（個人蔵・絹本4幅・133.0cm×157.0cm〔内寸〕）



立山曼荼羅「大仙坊 A 本」(絹本 4 幅・大仙坊所蔵) の画像を活用した図像分節及び名付図

立山曼荼羅とは？

立山曼荼羅は、立山にかかる山岳宗教、いわゆる、「立山信仰」の内容が、大きなものでは縦160cm×横240cmの大画面に網羅的に描かれた掛軸式絵画のことである。これまでに各地で58点の作品が確認されている。

画面には、立山の山岳景観を背景として、この曼荼羅の主題である「立山開山縁起」のいくつかの場面をはじめ、立山地獄の様子、阿弥陀如来と諸菩薩の来迎場面、立山山麓・山中の名所や旧跡、芦嶋寺布橋灌頂会の様子などが、マンダラのシンボルである日輪（太陽）・月輪（月）や参詣者などとともに、巧みな画面構成で描かれている。

こうした立山曼荼羅は、立山信仰を護持し、各地で勧進布教をした立山衆徒（芦嶋寺衆徒と岩嶋寺衆徒）に絵解きされ、立山信仰の世界観や御利益が、庶民のみならず徳川將軍夫人や江戸城大奥女中、幕府老中や諸大名など、最上流の人々にまで、幅広く受け入れられた。

立山信仰は山中の血の池に由来する血盆經信仰や布橋灌頂会など、女人救済に特徴があった。信徒には新吉原の遊女も見られ、また作品のなかには天璋院篤姫や皇女和宮にゆかりの立山曼荼羅も存在する。

5.立山地 獄

立山地獄

立山は平安時代の古くから、日本人の間で山中に地獄が実在する山として知られていた。同時代の仏教説話集『今昔物語集』には、越中立山の地獄は死者の靈魂が集まる場所として描かれ、その一節の「日本國の人、罪を造りて多く此の立山の地獄に墮つと云へり」との文言から、当時の都の貴族や僧侶、山岳修行者たちの立山地獄に対する認識がうかがわれる。

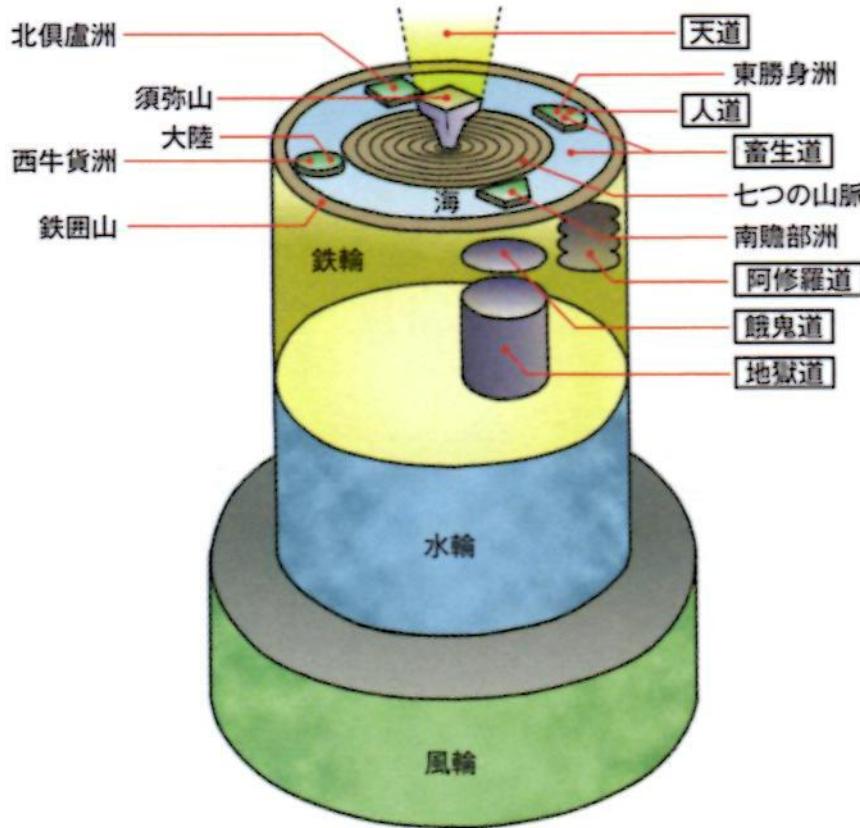
江戸時代には、立山に登ると亡き人に会える、あるいは生きているうちに地獄の苦しみを済ませておき、死後はそれを免れ、速やかに極楽浄土へ往生したいといった人々の想いから、立山禅定登山の際、山中の地獄谷巡りは頂上の峰本社の参拝とともに絶対に欠かせないコースとなっていた。

それゆえ、立山衆徒の立山曼荼羅を用いた布教活動では、立山地獄にかかる内容は、信徒を惹き付けるための最も重要な話題であった。それに対応して立山曼荼羅の画面でも、当然その場面に大きくスペースが割かれ、閻魔王が亡者を裁く場面をはじめ、等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・阿鼻の八大地獄、阿修羅道・畜生道・餓鬼道などの六道世界、女性にかかる血の池地獄や石女地獄など、様々な責め苦の様子が所狭しと描き込まれた。



『須弥山世界全体図』

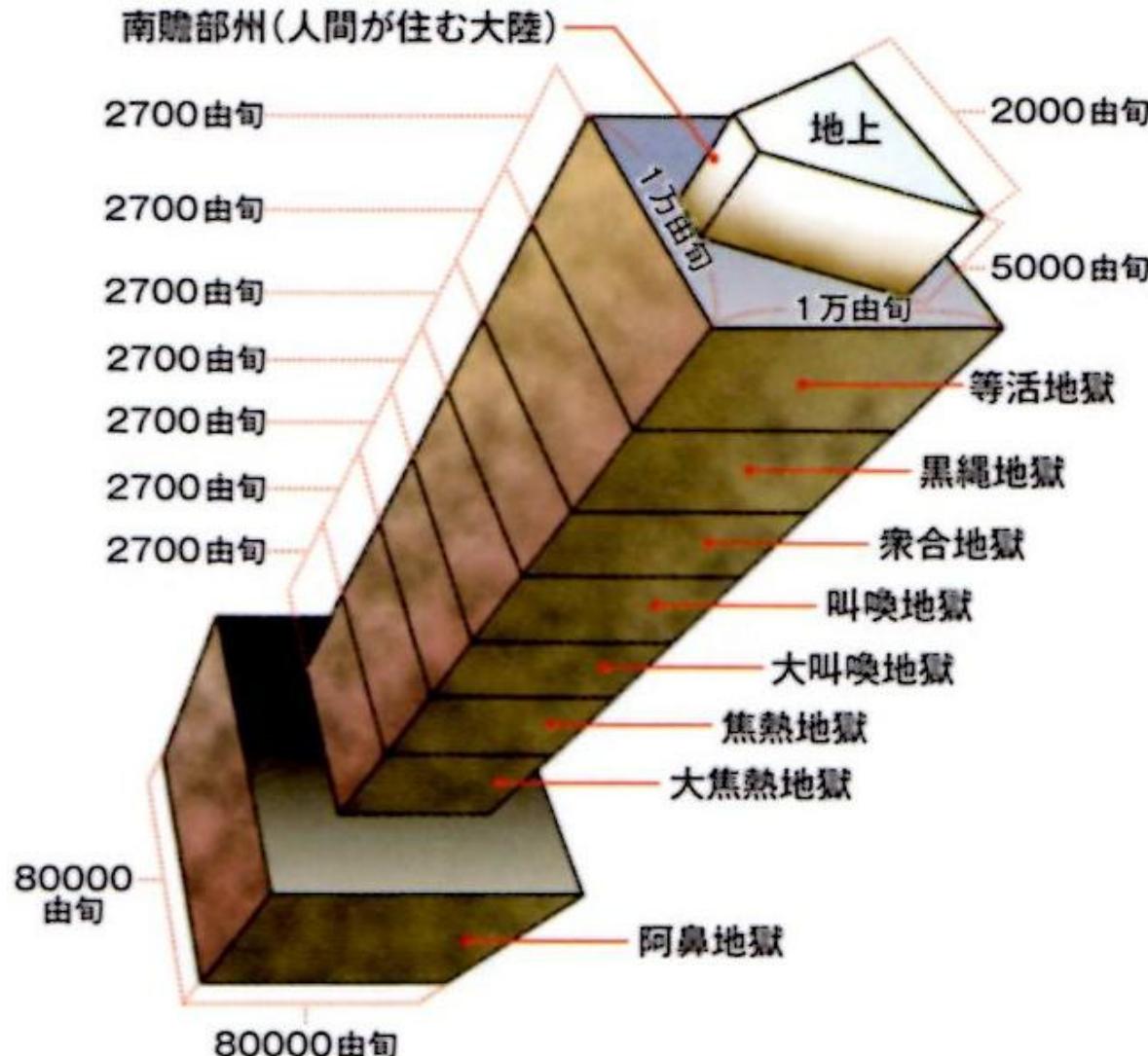
世界の中心に山や柱、樹があるとする思想は世界中にあるといわれている。仏教では、須弥山が世界の中心となっている。



とうしうしんしゅう 東勝神洲	須弥山の東に位置する半月の形をした大陸であり、「西遊記」の孫悟空の出生地だとされている。
なんせん ぶ しゅう 南贍部洲	須弥山の南に位置する台形の大陸であり、この大陸の地下に餓鬼道と地獄道が存在している。
さい ご か しゅう 西牛貨洲	須弥山の西に位置する円形の大陸。
ほく く る しゅう 北俱盧洲	須弥山の北に位置する正方形の大陸。以上四つの大陸に我々人間が生きている。

『八大地獄のイメージ図』

仏教の思想では、われわれが住んでいる世界の下に、広大な地獄が存在している。上から殺生、盗み、邪淫、飲酒、妄語、邪見、子どもや尼への強姦、親や偉いお坊さんを殺害した罪を犯した者の行く場所となっている。



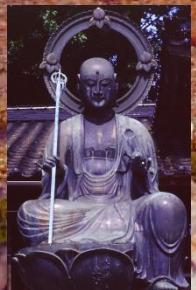
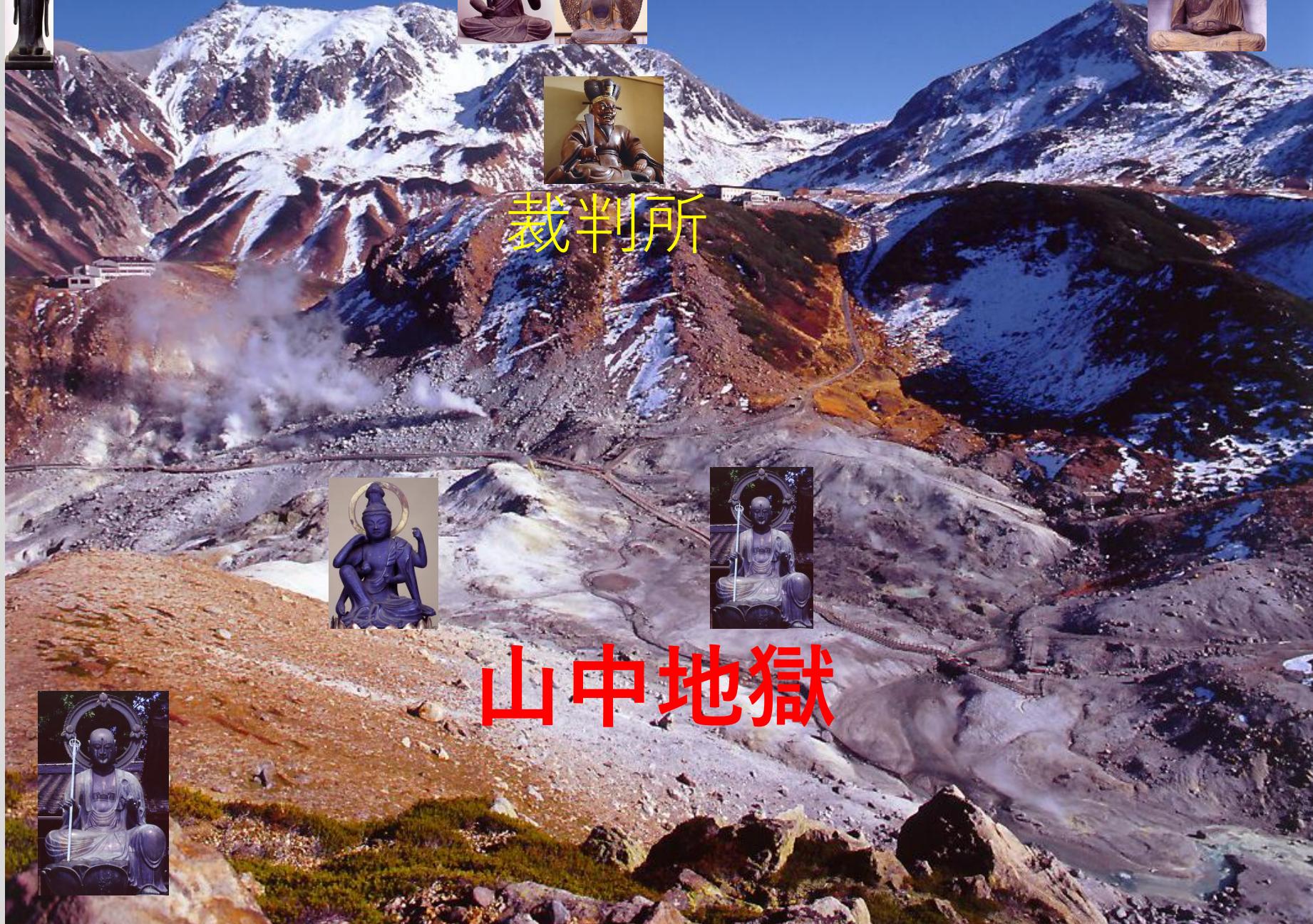


立山山中は死者の世界

山中淨土

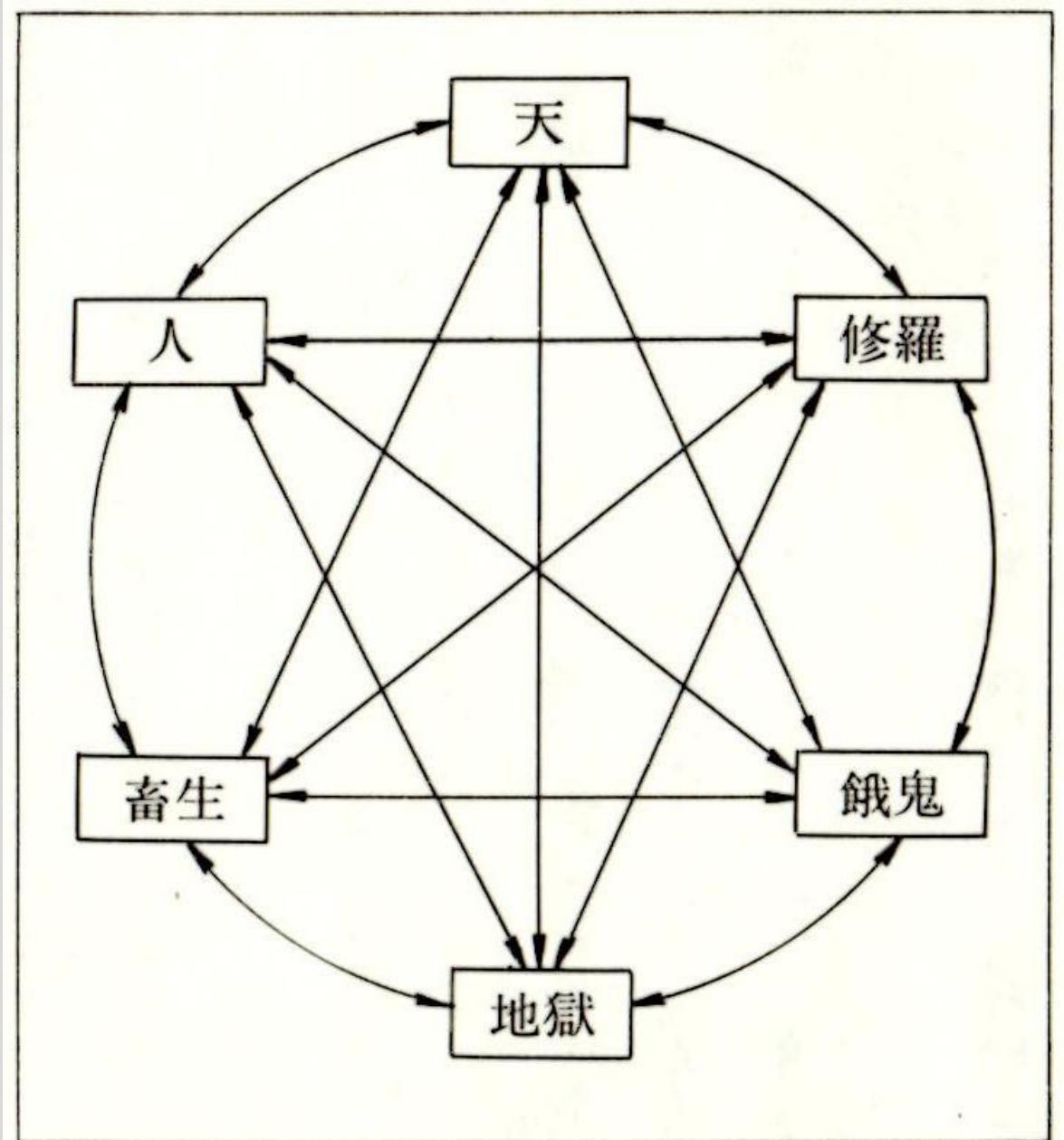


裁判所

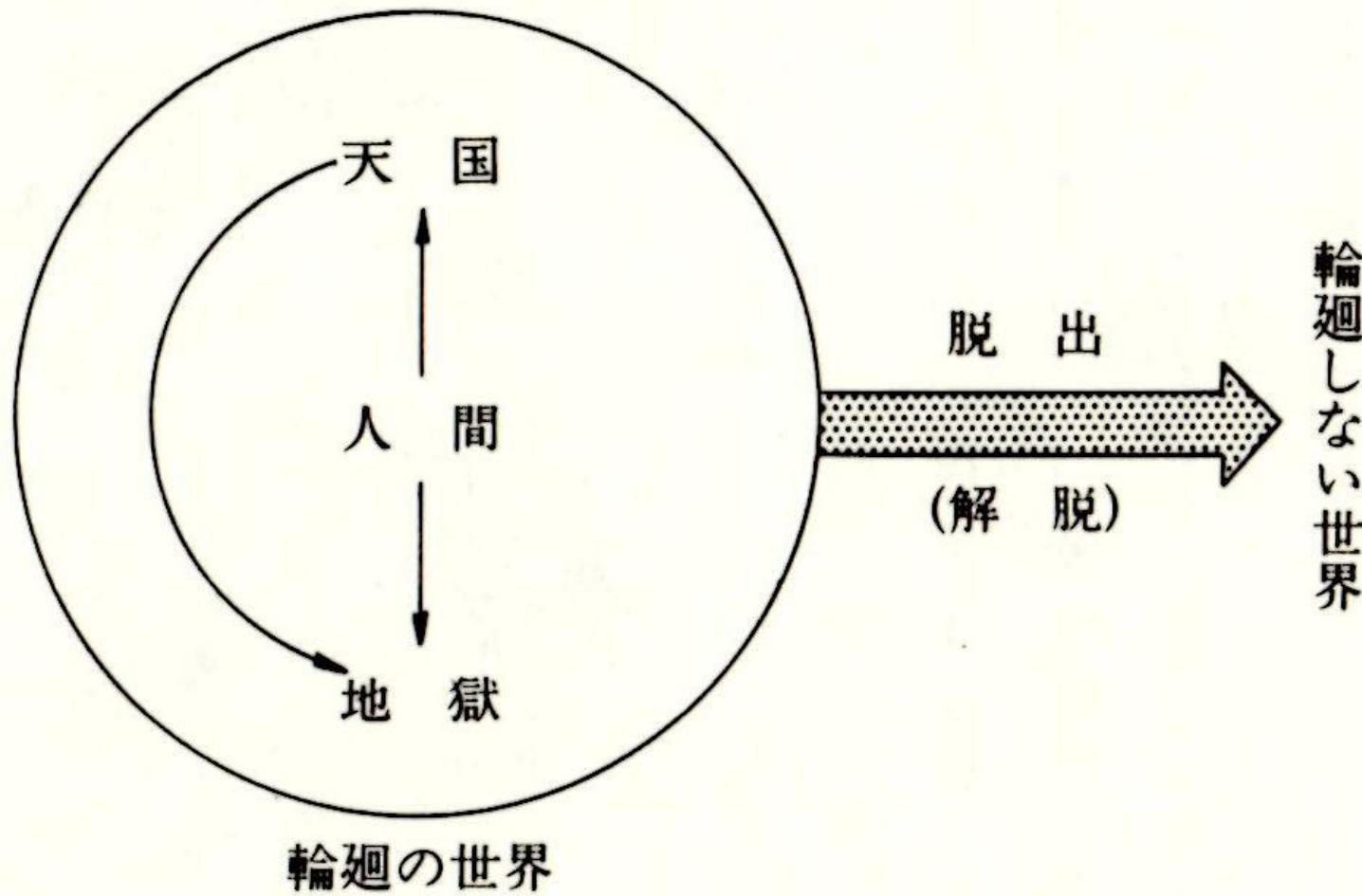


山中地獄





第2図 六道——輪廻の世界



第1図 輪廻の世界と輪廻しない世界

源信（げんしん）（惠心僧都）

942～1017。平安中期の僧。9歳で比叡山で天台宗の良源に師事。のちに貴族化する天台教団をはなれ横川の惠心院で隠棲し、『往生要集』を著し、淨土信仰に大きな影響を与えた。

『往生要集』は源信が985年に著した仏教書で、百数十の教典の中からやさしい言葉で、往生の要点や地獄・極楽の様子を書き抜いたもの。

表A 地獄に墮ちる罪

等活地獄	殺生					
黒縄地獄	殺生	盗み				
衆合地獄	殺生	盗み	邪淫			
叫喚地獄	殺生	盗み	邪淫	飲酒		
大叫喚地獄	殺生	盗み	邪淫	飲酒	妄語	
焦熱地獄	殺生	盗み	邪淫	飲酒	妄語	邪見
大焦熱地獄	殺生	盗み	邪淫	飲酒	妄語	邪見
阿鼻地獄	五逆罪を犯し、因果を否定、大乗を誹謗、破戒、 信者の布施を受けてのうのうと暮らしていた者					

十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一		
慈恩王	拔苦王	蓮上王	五道転輪王	都市王	平等王	太山王	變成王	閻魔王	五官王	宋帝王	初江王	秦広王	不動明王	王の名前
虛空藏菩薩	大日如來	阿閦如來	阿彌陀如來	勢至菩薩	觀音菩薩	藥師如來	弥勒菩薩	地藏菩薩	普賢菩薩	文殊菩薩	釈迦如來	本地仏		
三十三回忌	十三回忌	七回忌	三回忌	一周忌	百か日	七七日	六七日	五七日	四七日	三七日	二七日	初七日	裁きの日	



血の池地獄と如意輪觀世音菩薩



護符（血盆経）



血の池

「女人禁制」についての議論

- ①女性の月経や出産に際する血の穢れに対する不浄感
- ②仏教の戒律（不邪婬戒）の適用
- ③仏典に見える女性蔑視思想
- ④日本民俗の本質に根ざす

『法華經』卷5 「提婆達多品」 第12

【登場する仏・菩薩・聖者】

- 釈尊・多宝如来
- 文殊菩薩・智積菩薩
- 竜宮に住む裟竭羅竜王の娘
- 舍利弗

女性というものは法を受ける器にあらずと言われている。悟りを得るなどということは決してできない。女人には五障があり、梵天・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身の五つにはなれず、成仏は難しいと説く。

竜女は宝珠を仏に奉ると男性になって、菩薩～仏になった（变成男子・竜女成仏）。

▼五障（ごしょう）

『法華経』提婆達多品など仏典にみえる語で、女性は梵天王・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏の五つの位につけない存在とするもの。

日本では「障」を「さわり」とも訓じ、「五障三従」の罪深き女といった表現で「三従」と結び付けて使う場合もある。

なお三従は未婚の時は父、嫁しては夫、夫死後は息子と、女性は常に男性に従うべき存在とする考えで、儒教やインドのマヌ法典にもみえる。

▼女身垢櫬（によしんくえ）

『法華経』では五障の理由として女性は穢れており仏法を受ける器ではないと説いている。

▼变成男子（へんじょうなんし）

五障の身である女性は女身のままで成仏できないと説かれ、成仏するために女性が男性に性転換すること。転女成男ともいう。



両婦地獄



石女地獄



畜生道・森尻の智明坊



餓鬼道



阿修羅道

天女（天道）





別山（帝釈ヶ岳）山頂の硯ヶ池

6.立山淨 土

立山浄土

立山曼荼羅の画面には、立山山中の地獄谷のあたりに、立山地獄に墮ちた亡者に対する責め苦の様子が強調して描かれている。一方、それに相対するかのように、地獄谷から対角線上に位置する立山連峰の雄山とその右手の浄土山、あるいは雄山とその左手の大汝山の山間に、阿弥陀如来と聖衆（聖者の群衆、菩薩たちのこと）の来迎が描かれている。そこには阿弥陀如来が教主として住む西方極楽浄土の様子そのものは見られないものの、この、いわゆる阿弥陀聖衆来迎の図柄をもって立山浄土の場面としている。

来迎とは念佛行者の臨終の際、阿弥陀如来が脇侍の觀音菩薩や勢至菩薩とともに（これを阿弥陀三尊という）、または、その他の25名の菩薩とともに飛雲に乗り、楽器を演奏しながら死者を迎えてきて、極楽浄土へ連れていくことである。

ところで、いずれの立山曼荼羅を見ても、阿弥陀如来と聖衆の来迎場面は、おおむね雄山と浄土山の山間に描かれている。そのわけはどうも立山の自然現象にあるようだ。立山の雄山山頂では、朝日が昇るとき、東が晴れていて西に霧がかかっていると、霧中に自分の影とそれを取り巻く美しい輪があることがある。いわゆるブロッケン現象であるが、夏場は雄山と浄土山の山間あたりにこの不思議な自然現象がときどき見られる。おそらく、これがいつの頃からか極楽浄土からの阿弥陀如来の来迎に見立てられ、特別に信仰されようになったのであろう。阿弥陀如来の極楽浄土に由来する浄土山という山名も、こうした現象をもとにつけられたと推測される。





7.立山開山縁 起

立山開山縁起

立山を仏の阿弥陀如来のお告げによって開山（仏教修行ができるように、登山道を整備したり堂舎を建てたりする）した人物は、一般的には「佐伯有頼」（佐伯有若や地元の狩人とする場合もある）とされているが、それにまつわる物語を記したもののが「立山開山縁起」である。

立山開山縁起には、『類聚既驗抄』（鎌倉時代編纂）や『伊呂波字類抄』十巻本の「立山大菩薩顯給本縁起」（鎌倉時代増補）、『神道集』巻4の「越中立山權現事」（南北朝時代編纂）、『和漢三才図会』（江戸時代正徳期の編纂）など、いくつもの種類が見られる。

また、このほかにも、立山信仰の拠点集落であった芦嶋寺と岩嶋寺に、宿坊衆徒や社人により江戸時代中期から末期にかけて制作された「立山大縁起」や「立山小縁起」、「立山略縁起」などが見られる。

芦嶋寺相真坊本「立山略縁起」に記された立山開山縁起の粗筋

近江国志賀の都で暮らしていた佐伯有若は、大宝元年（701）、文武天皇の命を受け、越中守として越中国に赴任し、新川郡宇布施の院に居城（布施城）を構えた。

翌年、有若の息子有頼は、父・有若の白鷹をもって鷹狩りに出たが、その最中、白鷹が遙か山の方へ逃げてしまった。それを家来に聞いた有若は激怒した。有頼は父の怒りを解くため家来を帰し、一人で白鷹を探した。

苦労の末に白鷹を見つけ、鈴を鳴らして呼び寄せると、そこに突然獰猛な熊が現れて吠えたので、白鷹は驚いて再び飛び去った。さらに熊は有頼に襲いかかってきた。有頼はとっさに熊に向かって矢を射ると、矢は熊の月の輪に命中した。しかし熊は絶命せず、矢を刺したまま血を流して逃げていった。いつのまにか白鷹も熊についていく。有頼は怒りながら熊と白鷹を追跡した。

途中、夢のなかに老人が現れ、熊が立山山中に入ったことを教えてくれた。有頼は熊の血の跡を追って立山山中に入り熊と白鷹を発見したが、すると両者は玉殿窟に逃げ込んだ。有頼が洞窟に向かうと、そこに金色で生身の阿弥陀如来と不動明王が現れ、極楽浄土の世界が広がった。阿弥陀の胸には有頼が熊に射た矢が刺さり、血が流れていた。実は熊の正体は阿弥陀如来であり、有頼に立山を開山させようとしたのである。有頼は仏を危めた罪を懺悔し自害しようとしたが、その時、薬勢仙人が現れそれを止めた。薬勢仙人は有頼に僧侶慈朝の弟子になることを勧めた。

有頼は慈朝の弟子となり、出家して慈興と改名し、厳しい修行をして立山を開いた。



布施城（布施の館）



立山開山縁起の一場面。佐伯有頼が熊に矢を射る。矢は熊に命中したが、熊は傷を負ったまま逃げる。それを追いかける佐伯有頼。



呉羽山展望台の佐伯有頼像



立山開山縁起の一場面。

玉殿窟。

殿窟に現れた矢
疵阿弥陀如来と
不動明王。その
靈験に平伏する
佐伯有頼。

玉殿窟



日本の諸山の開山伝承

1. 開山伝承の実態（開山伝承（縁起）には後世付会された説が多い）

（1）実在の修行者が開いた霊山

・泰澄（たいちょう）	白山（福井・石川・岐阜県）	養老元年(717)
・万巻（満願）（まんがん）	箱根山（神奈川県）	天平宝字元年(757)
・勝道（しょうどう）	補陀落山〔日光山〕（栃木県）	天応2年(782)
・徳一（とくいつ）	筑波山（茨城県）	延暦年中(782～806)
	磐梯山（福島県）	大同2年(807)

（2）実在の修行者が開山したと伝えるが、後世の付会と思われるもの

・役小角（えんのおづぬ）

葛城山〔金剛山〕（奈良県・大阪府）、金峯山（奈良県）、大峯山（奈良県）、
信貴山（奈良県）、犬鳴山（大阪府）、生駒山（奈良県・大阪府）、笠置山（京都府）、
愛宕山（京都府）、飯道山（滋賀県）、神峰山（大阪府）、後山（兵庫・岡山県）、
三徳山（鳥取県）、彦山〔英彦山〕（福岡県）、宝満山（福岡県）、八菅山（神奈川県）、
三峰山（埼玉県）、恵那山（長野県）、金峰山（山形県）

・泰澄（たいちょう）

養老山（石川県）、石動山（石川・富山県）

・行基（ぎょうき）

大滝山（香川・徳島県）、雲仙岳（長崎県）、秋葉山（静岡県）、高尾山（東京都）、
御嶽（東京都）、葉山（山形県）、

・良弁（ろうべん）

大山（神奈川県）

・勝道（しょうどう）

赤城山（群馬県）

・空海（くうかい）

篠山（愛媛・高知県）、八海山（新潟県）、湯殿山（山形県）

・円仁（えんにん）

靈山（福島県）、山寺（山形県）、金峰山（山形県）、恐山（青森県）

(3) 修行者が開いたと伝えるが、架空の人物と思われるもの

- | | |
|-------------------|------------------------------------|
| ・裸行（らぎょう） | 熊野那智山(和歌山県)、熊野新宮神倉山(和歌山県)、妙高山(新潟県) |
| ・金連(金蓮)（こんれん） | 大山(鳥取県) |
| ・法道（ほうどう） | 雪彦山（兵庫県） |
| ・忍辱（にんにく） | 彦山〔英彦山〕（福岡県） |
| ・心蓮（しんれん） | 宝満山〔竈門山〕（福岡県） |
| ・猛覚摩ト仙（もうかくまぼくせん） | 求菩提山(福岡県) |
| ・仁聞（にんもん） | 宇佐御許山(大分県)、国東六郷山(大分県) |
| ・慶胤（ぎょういん） | 霧島山(宮崎・鹿児島県) |
| ・安敬（あんけい） | 飯道山(滋賀県) |
| ・智徳（ちとく） | 石動山(石川、富山県) |
| ・慈興（じこう） | 立山(富山県) |
| ・学問（がくもん） | 戸隠山(長野県) |
| ・暁台（ぎょうだい） | 朝熊山(三重県) |
| ・利修（りしゅう） | 鳳来寺山(愛知県) |
| ・松葉（まつば） | 日金山(静岡県) |
| ・聖占（しょうぜん） | 箱根山駒ヶ岳(神奈川県) |
| ・能除仙（のうじょせん） | 羽黒山(山形県) |
| ・願行（がんぎょう） | 蔵王山(山形県) |

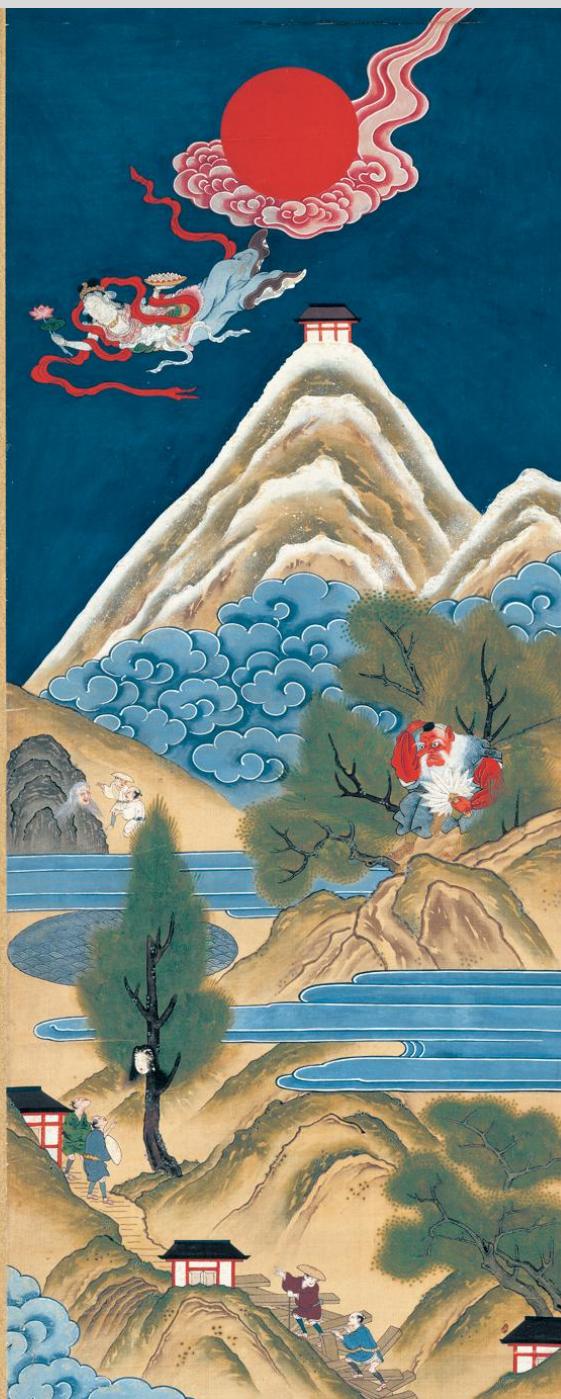
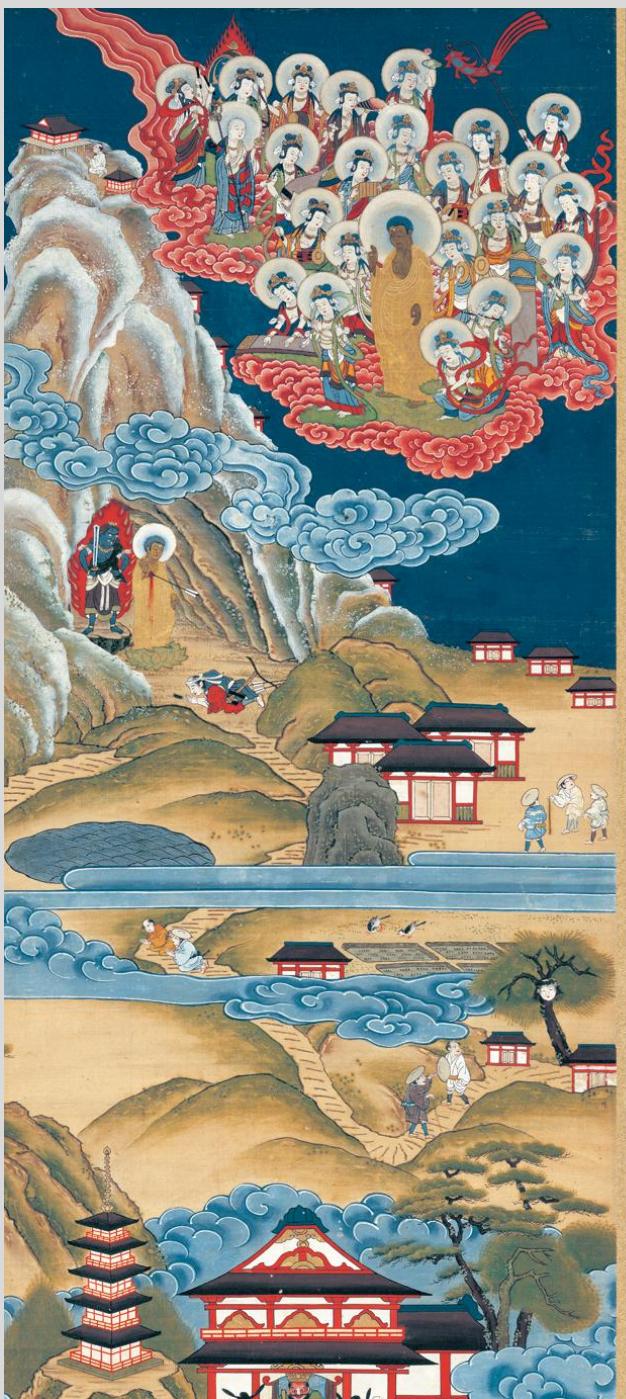
2. 狩人開山伝承の内容

狩人が開山したという伝承のある霊山は全国に多いと思われる。
紀伊熊野三山、豊前彦山(英彦山)、伯耆大山、越中立山、陸中早池峯山、
伊予黒滝山、伊予出石山

3. 狩人開山伝承の構造

- (1) 山岳神の創祀が本地垂迹説によって語られている。
- (2) 山岳神の本地仏が獣に化身して狩人に射たれ、仏に不敬の行為をしたことで気づかせて発心させる。
- (3) 改心した狩人はついに僧になるが、僧となるには指導者が必要で、物語に師が登上する。
- (4) 僧となった狩人はその山に修行し、山上・山下に社殿堂宇を建立し、神仏をまつて一山靈場の基礎を築く。

8.立山禅定登山案 内[。]

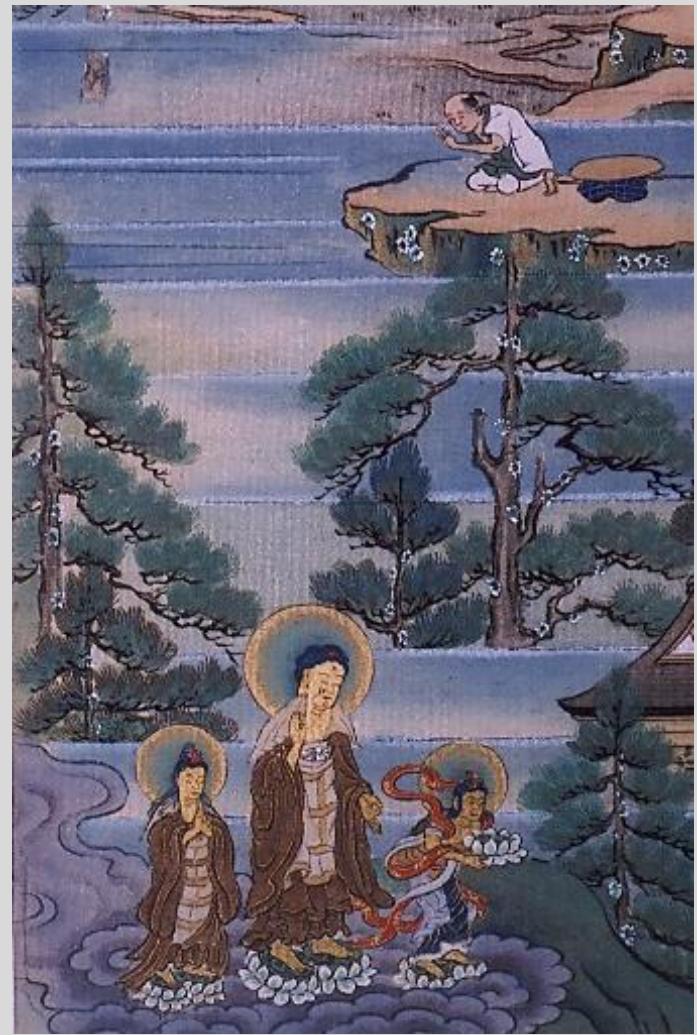




立山杉



餓鬼の田圃



称名滝と伏拝（『立山曼荼羅 吉祥坊本（部分）』富山県〔立山博物館〕蔵）



称名滝



一ノ谷～獅子ヶ鼻の鎖場。弘法大師空海。光藏坊。扇の松。



姥石・女性の亡者・廻国修行者



鏡石



獅子ヶ鼻



石造 役行者椅像（立山峰本社蔵）



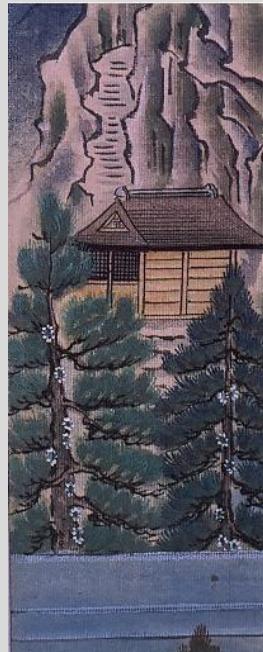
木造 弘法大師坐像（雄山神社峰本社蔵）



室堂小屋



六軒堂





室堂小屋は、立山山中の室堂にある歴史的建造物。国の重要文化財に指定されている。「立山室堂」と呼ばれる場合もある。20世紀後半の1980年代まで宿泊施設（立山室堂山荘の山小屋）として実用に供されたが、文化財指定にともなって新しい山荘が隣接地に建設され、現在は文化財として保存されている。雄山山頂の雄山神社峰本社への参詣者のための宿泊、立山遙拝などに用いられた信仰施設である。北室と南室の2棟からなり、史料から北室は享保11年（1726）、南室は明和8年（1771）の建立と推定される。



一ノ越～五ノ越。雄山山頂の雄山神社峰本社。

9. 芦嶽寺の姥尊信仰



『立山曼荼羅 大仙坊A本（姥堂・姥尊・奪衣婆）』（個人蔵・絹本着色・4幅・133.0cm×157.0cm [内寸]）

江戸時代、立山信仰の拠点村落である芦嶺寺は加賀藩の支配下に置かれ、38軒の宿坊を構え、同藩の祈願所や立山禅定登山の基地としての役割を果たしていた。宿坊の主人は加賀藩の身分支配上は宗教者として扱われ、衆徒と称された。

芦嶺寺衆徒は実生活上は焼畑も行い半僧半俗のかたちをとっていた。同時代、芦嶺寺集落には、芦嶺中宮寺の施設として姥堂・閻魔堂・帝釈堂・布橋・立山開山堂・講堂・拝殿・大宮・若宮・立山開山廟所などが建ち並んでいた。このうち姥堂は、江戸時代、姥谷川の左岸、閻魔堂の先の布橋を渡った所に、入母屋造、唐様の建築様式で立っていた。

堂内には本尊3体の姥尊像が須弥壇上の厨子に祀られ、さらにその両脇壇上には、江戸時代の日本の国数にちなみ、66体の姥尊像が祀られていた。その姿は乳房を垂らした老婆で、片膝を立てて座す。容貌は髪が長く、目を見開き、中には口をカッと開けたものや般若相のものもあり、いかにも恐ろしげである。

現存の像は、いずれも南北朝時代（現存最古の姥尊は永和元年[1375]に成立したものである）から江戸時代にかけて作られている。

この異形の姥尊は、芦嶺寺の人々にはもとより、越中国主佐々成政や加賀初代藩主前田利家らの武将たちにも、芦嶺寺で最も重要な尊体と位置づけられ、信仰された。

芦嶋寺が立山信仰の宗教村落になる以前から、同村には獵師や杣・木挽などの山民や焼畑農民が存在しており、彼らは山の神に対する信仰をもっていたと推測される。それは縄文時代につながるものかもしれない。芦嶋寺の姥尊は、まずこうした山の神を起源とするものであろう。

姥尊は、その後、同村が宗教村落として展開していくなかで、鎌倉時代頃から日本で盛んになった外来の十王信仰の影響を受け、南北朝時代頃までには、三途の川の奪衣婆と習合した。

江戸時代になると奪衣婆の信仰が庶民に広まり、ますます盛んになるにつれ、芦嶋寺の姥尊も奪衣婆そのものになっていった。しかし、おそらく妖怪的な奪衣婆では、外部者に対して体裁が悪かったのだろう。そこで衆徒たちは姥尊の縁起を作り、それに仏教の尊格を当てた。

まず姥尊を立山大権現の親神とし、次に阿弥陀如来・釈迦如来・大日如来・不動明王などの本地を説き、それが垂迹して、醜いけれども奪衣婆的な姥尊の姿で衆生を救済するのだとした。



芦嶺寺姥堂と姥尊





10. 芦嶼寺の布橋灌頂 会





『立山曼荼羅 大仙坊A本（布橋灌頂会の場面）』（個人蔵・絹本4幅・133.0cm×157.0cm〔内寸〕）

芦嶋寺の布橋灌頂会

江戸時代、越中立山は山中に地獄や浄土がある“あの世”と考えられていた。

人々はあの世の立山に入山することで擬似的に死者となり、地獄の責め苦に見立てられた厳しい禪定登山を行うことで、自分の罪を滅ぼして下山する。こうして新たな人格・生命に再生し、現世の安穏や死後の浄土往生が約束された。

しかし、当時の立山は女人禁制の靈場であった。そこで、江戸時代、毎年秋彼岸の中日に山麓の芦嶋寺村（現、富山県中新川郡立山町）では、男性の禪定登山と同義の儀礼として、村の閻魔堂・布橋・姥堂の宗教施設を舞台に、女性の浄土往生を願って「布橋大灌頂」と称する法会が開催された。

地元宿坊衆徒の主催により、全国から参集した女性参詣者（実際は男性参詣者も参加していた）は閻魔堂で懺悔の儀式を受け、次にこの世とあの世の境界の布橋を渡り、死後の世界に赴く。そこには立山山中に見立てられた姥堂（芦嶋寺の人々の山の神を根源とする姥尊が祀られている）があり、堂内で天台系の儀式を受けた。こうして、すべての儀式に参加した女性は、受戒し血脈を授かり、男性のように死後の浄土往生が約束されたのである。

なお、芦嶋寺村の伝承では、布橋大灌頂の参加者は、白布が敷き渡された布橋を目隠しをして渡ったが、信心が薄く、邪心のある者は、布橋が細蟹（クモのこと。また、クモの網）の網糸より細く見えてうまく渡れず、橋から姥谷川に転落し、その川に棲む大蛇に巻かれて死んでしまうという。









姥堂基壇から見た立山連峰